近代日本語資料の人名、地名と物名の漢訳問題について

―『航西日記』を中心に―

戴　秋娟・章　暁強

A Research on Translating Personal Names, Place Names and Object Names from Modern Japanese Literature into Chinese:

Centering around *Kosei-nikki*

Dai Qiujuan,　Zhang Xiaoqiang

Abstract: Historical research must be built on a sufficient foundation of historical materials and literature, and Japanese studies are no exception. Recently, with the improvement of Chinese scholars' proficiency in Japanese, it is not uncommon to directly use contemporary Japanese literature for research. However, the utilization of modern Japanese historical materials and literature is not comprehensive enough. The situation is not only related to the emphasis on contemporary Japanese history in China, but also due to the difficulty in interpreting modern Japanese historical materials and literature. While many Chinese scholars excel in interpreting modern Japanese historical materials and literature, their work is often less known to those outside the academic community. Therefore, focusing on the translation experience of "*Kosei-nikki*（*航西日記*）" from Japanese to Chinese, this article discusses the translation issues related to personal names, place names, and object names expressed in Chinese or foreign language. And explores cultural differences between Orient and Occident, and so on. Also,

introduces various challenges in translating modern Japanese historical materials and literature.

Key words: Modern, Japanese literature, *Kosei-nikki*（*航西日記*）, Japanese-Chinese translation, Names of personal and place and object.

キーワード：近代日本語資料、『航西日記』、漢訳、人名・地名・物名

はじめに

日本と中国との交流は7世紀推古天皇の時代から始まったとされるが、遣隋使と遣唐使は大陸の進んだ政治、文化、文物を伝え、古代日本の国家体制や文化の形成に大きな影響を与えた。一方、近代日本は中国人留学生の主な留学先として、近代中国の文明開化に不可欠な影響を与えた。近年、中国学界における「日本研究ブーム」が盛んになるとともに、現代日本語の資料よりも明治期のやや古い日本語の表現で記されている諸史料の学術的価値が高く、それをめぐる検索、利用や解読などが注目されている。

本論文では、筆者が取り組んでいる日本の資本主義の父ともいわれる渋沢栄一によって書かれた『航西日記』（1871）の漢訳をめぐる諸問題を中心に、近代の日本語文献資料（以下、「近代日本語資料」と略す）の漢訳問題を検討する。『航西日記』を翻訳している中で、気づいた点、例えば、漢字又は外来語で表記される人名、地名と物名の漢訳などをめぐって、具体的な事例への対処方法や翻訳する上でのノウハウ、訳語の選択や留意点などを通じて、中日両国間の文化的差異が漢訳に及ぼす影響について論じてみる。

一、漢訳の対象となる渋沢栄一の『航西日記』について

武蔵国榛沢郡血洗島村（現・埼玉県深谷市血洗島）の富農家庭出身の渋沢栄一（1840-1931）は幼い頃から良好な商業経営の頭脳と能力を持っていた。1867年に渋沢栄一は徳川昭武使節団（以下「使節団」と略す）の陸軍奉行支配調役として、横浜から欧州に向かった。帰国後の1871年に欧州滞在中の見聞を記し、杉浦譲（1835-1877、即ち杉浦靄人）の日記と合わせて、『航西日記』を出版した。[1]

『航西日記』の初版は1871年に刊行され、原本の影印である。第二版は1928年に刊行された活字版である。その後、東京大学出版会によって1967年と2015年に再版された。本稿で参照したのは1871年版と1928年版[2]である。初めて西洋社会を体験した渋沢栄一は東洋の立ち遅れを感じただけでなく、西洋の科学技術と文化の発展した状況、特にビジネスの繁栄を目の当たりにした。パリでビジネスマンがフランスの政府高官と対等に交流することは、伝統的な「重農観念」に影響された彼に大きな衝撃を与えたに違いない。この期間中、渋沢栄一は使節団の一員としてフルーリ・エラール[3]などの西洋人の指導の下、ヨーロッパ各地の風土及び産業革命後の西洋社会を理解することができたが、これらはいずれも彼が「近代日本経済の父」に成長するために不可欠な思想転換の礎を築いたのである。

『航西日記』の記載によれば、使節団一行は横浜港から出発し、中国、東南アジア、南アジア、中東などの地方を経て、最終的にヨーロッパ大陸に到着した。その間に経験した地域の風貌と見聞したもの、及び出会った外国人はすべて日記に登場している。しかし、近代に入ってからの日本語の変化によって、『航西日記』は今日読んでその意味を把握できても、人名、地名と物名について難解な点が残っている。

近代日本語資料には数多く見知らぬ人名、地名と物名がある。その中

には旧体字、繁体字、異体字があり、外来語、仮名も含まれる。それを翻訳することは簡単ではない。しかし、これらの語彙を解読することによって、当時の風土人情と人間関係だけでなく、異なった時代の語彙の比較を通じて近代日本語の変化過程をも理解することができる。本論文では、『航西日記』に登場する人名、地名と物名に対する解読に焦点を当て、その対応の仕方と解決策を紹介する。

二、近代日本語資料における人名の漢訳問題

『航西日記』における「人名」の表現形式は二種類あり、一つは漢字の人名であり、もう一つは外来語の人名である。前者に関して、同じく漢字文化圏に属する中日両国の学者にとってさほど難しくないが、後者は欧米諸国から伝わってきた言葉が多く、外遊紀行文としての『航西日記』によく使われており、現在の外来語の表現形式と少々違っている。本節では『航西日記』の中の比較的難しい漢字と外来語の人名を例にして、近代日本語資料の漢訳の経験や方法を模索する。

2.1　漢字の人名

漢字人名を翻訳する際、歴史人物の人名の複数の読み方に留意する必要がある。例えば、『航西日記』の中で複数回言及されていた「靄山」と「杉浦子基」は実際に同じ人物で、即ち「杉浦譲」のことである。漢訳する時には、歴史人物の生涯について把握するだけではなく、人名の前後統一にも留意したがほうがいい。『航西日記』に出現した重要な漢字人名の一部を表1にまとめた。

表1 『航西日記』にある漢字人名とその漢訳（一部）

番号	漢字人名	原文のページ	漢訳
①	伊達公	1	伊达宗城
②	杉浦子基	1	杉浦爱藏
③	靄山	1、2、149、150	杉浦爱藏
④	卯三	143	清水卯三郎

（出所）筆者作成。以下の表も同様。

番号①の「伊達公」は人名としての「伊達」と尊称としての「公」という二つの単語で表現されている。初版『航西日記』の刊行時期と、原文の内容を参考にし、[4]「伊達公」は「伊達宗城」を指していることが分かった。

『航西日記』の「叙」には、番号②の漢字人名「杉浦子基」がある。[5] 歴史背景と渋沢栄一の人間関係ネットワークと合わせて分析すると、「杉浦子基」は「杉浦譲」であることが分かった。[6] 番号③の「靄山」は「杉浦譲」の雅号である。したがって、番号②と③を中国語で通称とされた「杉浦爱藏」と訳した。

番号④の「卯三」の原文出所は「夫より靄山はアベンユーデモンタンクへ行て卯三（瑞穂屋）等に会し」[7] であるから、靄山と面会した人は瑞穂屋の卯三である可能性が高い。「瑞穂屋」と「卯三」をキーワードに国立国会図書館デジタルコレクションで検索してみたら、『英仏通弁自在：交際商用』[8] や『当世言逆論・政体篇』[9] などの資料がある。ということで、原文の「卯三」は「瑞穂屋」の事業で日本近代史に名を残した清水卯三郎（1829-1910）であると推測できる。

2.2 外来語の人名

漢字の人名と比べて、外来語の人名の漢訳はより難しい。主に以下の理由による。

第一に、外来語人名の語源は英語もあればフランス語もある為語源が一致していないので、漢訳が難しくなる。第二に、外来語の表現には些細な違いがあるが、実は同じ人物を指すことが多い。なぜならば、英語やフランス語などの外国語を日本語に訳す時には、半角化、長音化、濁音・半濁音化と非濁音・半濁音化、母音の変化、子音音節の変化と脱落などの音節の変化がよく見られる。以下、『航西日記』に登場した重要な歴史人物の外来語人名のリストを表2に整理した。

表2　『航西日記』にある外来語人名とその漢訳（一部）

番号	外来語人名	原文のページ	現代日本語の呼び方	外来語人名の由来語源	漢訳
①	カシヨン	43、45、47、48、185	メルメ・カション	法：Eugène Emmanuel Mermet-Cachon（1828-1889）	和春
②	シイボルト、シーホルト	4、48、141、142、155、157、164、179、188、189	シーボルト	英：Alexander George Gustav von Siebold（1846-1911）	希伊波鲁特
③	ニケイズ	156、157、160、161、162、163、164、165、166	ニケーズ	法：Nicaise（生没年不明）	尼凯斯
④	フランスフレデリー、フランスアンリイ、プランスフレデリー	153、154	プレンスフレデリック・ヘンドリック	英：Prince Willem Frederik Hendrik（1820-1879）	威廉・弗雷德里克・亨利
⑤	フロリヘラルトジユリイ、フロリヘラルトジユレー、プロリヘラルト	3、39、43、44、47、48、79、98、140、141、142、185	フルーリ・エラール	英：Fleury Herard（生没年不明）	弗洛里・赫拉尔德
⑥	ロードルスタンレン	188、189	ロードスタンリー	英：Lord Stanley（1826-1893）	史丹利勋爵
⑦	プランセスマチルド	59、101	プリンセスマチルド・ボナパルト	英：Princess Mathilde（1820-1904）	马蒂尔德・波拿巴公主

表2から、『航西日記』に登場した外来語人名の使用は前後一致しておらず、現代日本語の使い方とも一致していないことが分かった。近代日本語資料にある外来語カタカナと現代語との対応関係及び規則を整理して、以下の表3にまとめた。

表3　外来語のカタカナと現代日本語との対応および規則

番号	音節変化の種類	外来語のカタカナ	現代日本語との対応	規則のまとめ
①	半角化	カシヨン	カション	外来語カタカナにおける非語頭に位置する「ヨ」「ツ」「ユ」は「半角化」の可能性がある。
②	長音化	シイボルト	シーボルト	非語頭に位置する「イ」「ウ」は長音の「ー」となる。
		ニケイズ	ニケーズ	
③	濁音・半濁音化と非濁音・半濁音化	シーホルト	シーボルト	「ホ」「シ」「ト」「フ」などのカタカナは濁音の「ボ」「ジ」「ド」「ブ」となる。又は、半濁音の「ポ」「プ」(「ト」がない）となり、その逆もある。
		フランスフレデリー	プレンスフレデリック	
④	母音の変化	ロードルスタンレン	ロードスタンリー	非「ア行」カタカナの前部の子音は変化がなく、後部の母音は変化がある。「レre」と「リri」、「ラra」と「リri」などの例がある。
		プランセス	プリンセス	
⑤	子音音節の脱落と変化	フロリヘラルト	フルーリ・エラール	母音は変化せず、子音音節は脱落と変化の現象がある。
		フランスアンリイ	プリンス	

表3から以下のことが分かった。第一、「半角化」の現象。近代日本語資料を読めば、一般的に「ヨ」「ツ」「ユ」は「全角」で表現されている。しかし、現代日本語と対応してみれば、非語頭に位置する「ヨ」「ツ」「ユ」は「半角」の形式をとることが多い。それゆえ、近代日本語資料

を翻訳する際、「全角」としての「ヨ」「ツ」「ユ」が含まれた外来語人名に関して、「半角化」で対応する必要がある。

第二に、「長音化」の現象。非語頭に位置する「イ」「ウ」が長音の「ー」となることが多い。

第三に、「ホ」「シ」「ト」「フ」などのカタカナの濁音・半濁音化と非濁音・半濁音化の現象。近代日本語資料のカタカナを解読する際、「ホ」「シ」「ト」「フ」の表記は、現代日本語で濁音の「ボ」「ジ」「ド」「ブ」と半濁音の「ポ」「プ」になることが多い。

第四は、外来語人名の中の母音の変音現象である。日本語では「ア・イ・ウ・エ・オ」といった五つの母音があり、子音音節の「k」「s」「t」「n」「h」「m」「y」「r」「w」もある。近代日本語は現代日本語の発音と微かな違いがあり、それは外来語人名の母音が変音したからである。例えば、「ロードルスタンレン」の「レre」が「リri」に変音し、「ロードスタンリー（Lord Stanley）」となる。又は、「プランセス」の例もある。「プランセス」の「ラra」の母音「a」が「i」に変音し「リri」となり、即ち「プリンセス（princess）」のことである。

第五は、外来語人名の中の子音の変音現象である。「フロリヘラルト」の例を「子音音節の脱落と変化」を説明する。ローマ字表記で「フロリヘラルト」は「fu ro ri he ra ru to」となる。その「he」が「子音音節の脱落」の規則に従って、「e」となる。その外来語人名は最後の「フルーリ・エラール」となる。次に、「フランスアンリイ」の例を中心に「子音音節の変化」の現象を解明する。「フランス」が第三の「濁音化」の規則に従って、「フfu」が「プpu」となり、母音の音変規則を参考にして「プリンス」となる。

近代日本語資料における漢字・外来語の人名の漢訳規則は決して上述の内容だけではないが、『航西日記』の中の人名を翻訳する際の経験を

規則としてまとめたのが表3である。これらの規則は近代日本語資料の外来語人名の漢訳問題の解決には有意義な示唆を与えてくれただろう。

三、近代日本語資料における地名の漢訳問題

『航西日記』には、渋沢栄一が使節団の一員として外遊した時の風土とその見聞が記載されており、使節団一行は中国、ベトナム、シンガポール、スリランカ、アデン（Aden、当時はイギリスの植民地であった)、エジプト、フランス、スイス、イタリア、オランダ、ベルギー、イギリスなど十数の国と地域を遊歴し、三大陸（アジア・アフリカ・ヨーロッパ）と三大洋（太平洋・インド洋・大西洋）に足跡を残しているので、『航西日記』に記録された地名は多数ある。これらの地名は前節に触れた人名と同じように、漢字の地名と外来語（カタカナ）の地名に分類される。

3.1　漢字の地名

『航西日記』にある漢字の地名（部分）が整理されたのは表4である。

表4 『航西日記』にある漢字の地名とその現在の地名（一部）

番号	漢字の地名	原文のページ	漢訳のプロセス	現在の地名
①	土井个崎	5	「土」の音読みは「ど」であり、「都」は「と」である。前文の規則を参考に、「ど」は非濁音化となっているので、「と」と同様である。次に、「崎」は「海岬」の意味がある。	宮崎県都井岬
②	薩摩不二	5	日本語で「富士山」は「不二」とも呼ばれるので、「薩摩富士」と呼ばれる開聞岳も「薩摩不二」と呼ばれる。	「薩摩富士」と呼ばれる開聞岳

③	墨田川	16	「墨」でも、「隅」でも、仮名表記は同じ「すみ」である。	隅田川
④	柴棍	16	ベトナム語で「柴棍」の発音は「Sài Gòn」であるので、現代日本語の「サイゴン」(Saigon) にあたる。	西貢（今のホーチミン市である）
⑤	爪哇披（抜）隊比	21	中国語で「爪哇」は「インドネシア」である。実は、1928年版での「披」は1867年版で「抜」となり、中国語の発音の「ba」となる。ローマ字表記で「隊比」は「taibi」であり、即ち「タイビ」であるが、「タイビ」が音節変化を通って、「タヴィ」となる。要するに、「爪哇披（抜）隊比」は今インドネシアの「バタヴィア」(Batavia) である。	バタヴィア（インドネシアの首都ジャカルタ「Jakarta」の旧称である。中国語：巴达维亚）
⑥	麻都羅斯	26	「麻都羅斯」の音読みは「マトラス」であるので、「ト」が濁音の「ド」に変え「マドラス(Madras)」となる。近代のマドラスは「チェンナイ（Chennai)」のことであった。	マドラス（中国語：马德拉斯、金奈）
⑦	孟智世利	26、97	「孟智世利」の音読みは「ボンチセリ」である。「ボ」が「ポ」となり、「チ」が「ディ」となり、「セ」が「シェ」となり、それゆえ、「ボンチセリ」が「ポンディシェリ（Pondicherry)」となる。	ポンディシェリ（中国語：本地治里）
⑧	該禄	34	ローマ字表記で「該禄」の「該」は「gai」と呼ばれ、「禄」は「roku」と呼ばれる。要するに、「該禄」は「ガイロク」である。次に、「ガ」が「カ」となり、「ロク」の「ク」が脱落して「ロ」となる。最後は「ガイロク」が「カイロ」となる。	カイロ（中国語：开罗）
⑨	歌爾西克	38	「歌爾西克」の音読みは「カルシク」である。「カ」が「コ」となってから、「カルシク」が「コルシカ」となる。	コルシカ（中国語：科西嘉）

⑩	澳斯多利	81、91、97	「澳斯多利」の音読みは「オスドリ」である。次に、「ド」が「ト」となり、長音の「ー」と音節の「ア」を加えると、「オーストリア」となる。	オーストリア（英：Austria、中国語：奥地利）
⑪	巴社	81、109	「巴社」の音読みは「パシア」である。次に、「パ」が「ペ」となり、音節の「ル」が付いて、「ペルシア」となる。	ペルシア（中国語：波斯）
⑫	亜国	86	「亜国」の別称は「阿国」であり、漢字表記で「亜尓然丁」や「亜爾然丁」などの語彙がある。音読みで「亜尓然丁」とは「アルゼンチン」のことである。	アルゼンチン（中国語：阿根廷）

表4に基づいて、漢字地名の漢訳の特徴を以下のようにまとめられる。

第一に、日本では、地方の名前が漢字で、雅称によって示されることがある。このような地名を訳す時には、その漢字の意匠や意味に留意する必要がある。例えば、「薩摩不二」の「不二」は常に富士山の代称であり、「薩摩不二」は「薩摩富士山」と訳せる。周知のように、薩摩地区の開聞岳は薩摩半島南端に位置し、「薩摩富士山」と呼ばれる美称があり、使節団がここを通行した時に、この高い山を眺め、「薩摩不二」と呼ぶことは自然であろう。このほかに、説明的な別称も使われている。「土井个崎」を例にしてみる。日本の地名の中で「土井」の出る頻度が決して低くない。前文によって、使節団は横浜港から上海に向かっているので、ここの「土井」がおそらく日本列島の東側にあり、また「薩摩富士山」の呼び方から、「土井」は薩摩半島の隣地であると推測できる。「个」の当て字は「箇」であり、「箇」は「箇所」の意味がある。それゆえ「个」にはおそらく「地方、場所」の意味がある。「崎」は『広漢和辞典』で「曲岸」[10]の意味があり、『広辞苑』で「先の意」を表して、「岬（みさき）」の意もあり、「陸地が海に突き出た尖端」[11]と言われる。

この「土井」地方は使節団の郵船から見えたので、「崎」の位置が海に近い。それゆえ、「土井个崎」とは「土井」地方の「岬」である。Google Earthで確認すると、今宮崎県の都井岬がこの「土井个崎」と一致している。「土（ど）」は「都（と）」の読み方に近く、近代に音変が発生し、現在の「都井岬」になったと思われる。もう一つは、よく見られる古今の異語である。例えば、「墨」と「隅」の読み方はどちらも「スミ」であり、漢字が変わっただけで、『航西日記』やその他の近代日本語資料にはよく見られる。

第二に、外国の地名は常に音読みで、漢字で表現されている。これらの地名の漢訳は古今仮名の読み方の変化だけでなく、仮名の脱落と付加の現象もよく見られ、また訳者の漢文の素質も求められる。「該禄――ガイロ――カイロ（开罗）」や「歌爾西克――カルシク――コルシカ（科西嘉）」などの翻訳例は、表3でまとめられた規則によるものである。

筆者が訳者の古典漢文の教養を強調するのは、日本語の中の漢字は中国に由来し、その読み方は中国語とも関連しているからである。「柴棍」という語彙を例にしてみれば、古典中国語では「c」と「s」、「un」と「on」の読み方が似ている。次に、「亜国」の例もある。西洋人の名前と同じように、国名の漢字表記は中国での表記方法が起源となっている。中国で音訳されていた「Argentine」は「亜（ア）尓（ル）然（ゼン）丁（チン）」のこととなっている。この意味では、漢字文化の影響を多く受けていた近代日本語資料を理解するためには、古典漢文の知識が必要であろう。

3. 2　外来語の地名

次に、『航西日記』における外来語地名の漢訳の規則を紹介する。

表5 『航西日記』にある外来語地名と現在の地名（一部）

番号	外来語の地名	原文のページ	漢訳のプロセス	現在の地名
①	ホアントドガール	23	「ホアントドガール」は「ホアントド」と「ガール」に分けてから、「ホア」が「コロ」となり、「ガ」が「ゴ」となる。	コロンボ・ゴール（英：Colombo Galle、中国語：科伦坡加勒）
②	アルゼリー	31、97	「アルゼリー」の「ゼリ」は「ジェリ」となり、その後に「ア」をつける。	アルジェリア（英：Algeria、中国語：阿尔及利亚）
③	ガランドホテルドマルセーユ	39	「ガランドホテルドマルセーユ」はナカグロをつけてから、「グランド・ホテル・ド・マルセーユ」となる。	グランド・ホテル・ド・マルセーユ（法：Grand Hotel de Marseille、中国語：马赛大饭店）
④	ツーロン	40	「ツーロン」の「ツ」が「トゥ」となる。	トゥーロン（法：Toulon、中国語：土伦）
⑤	ヂユイロリー、チユイロリー、レセツプチユイス	47、55、56、60、101、102	「ヂユイロリー」の「ヂ」が「テ」となり、全角の「ユ」が半角の「ュ」となり、「ロ」が「ル」となる。	テュイルリー（法：Palais des Tuileries、中国語：杜伊勒里宫）
⑥	アルクドトリヨンフ	53、60、140	「アルクドトリヨンフ」はナカグロをつけて、「アルク・ド・トリヨンフ」となる。	エトワール（法：Arc de triumph、中国語：凯旋门）
⑦	バレイドランヂストリイー	100、102	「バレイドランヂストリイー」はナカグロをつけて、「バレイ・ド・ランヂストリイー」となる。	パレー・ド・ランヂストリー（法：Palais de l'Industrie、中国語：工业宫）

⑧	チユラン	167、169、174	「チユラン」の「ユ」が半角の「ュ」となり、「ラ」が「リ」となる。英語で「チュリン（Turin）」のことである。	トリノ（英：Turin、中国語：都灵）
⑨	ヘールマゼスチイスヤートル	193	「ヘールマゼスチイスヤートル」は「ヘール・マゼスチイ・スヤートル」となる。それぞれのカタカナを解読していくと、「ヘール」が英語の「Her」となり、「マゼスチイ（majeschi）」が「Majesty」となるから、最後では「Her Majesty」のことである。次に、「スヤートル」が「シアター」となる。	ハー・マジェスティーズ・シアター（英：Her Majesty's Theatre、中国語：女王陛下剧院）

近代日本語資料は長い外来語がよく使われているので、必要なところにナカグロを付けておけば、意味の解明に役立つ。例えば、「ホアントドガール」「ガランドホテルドマルセーユ」「バレイドランヂストリイー」の「ド」（「ガランド」を除いて）とは明らかにフランス語の前置詞（Preposition）としての「de」のことである。それゆえ、これらの長い外来語は「ホアント・ド・ガール」「ガランド・ホテル・ド・マルセーユ」「バレイ・ド・ランヂストリイー」と書き直すことができる。

『航西日記』の中にある外来語の地名は大まかに二種類に分けられる。一つは地理名称（アルジェリアやシャンベリなど）であり、時間が経っても大きく変化することがなく、たとえその名称が今では使われなくなっていても、歴史の変遷や沿革の中で手がかりを見つけることができる。もう一つは、市町にある具体的な場所の名称（テュイルリーやパレー・ド・ランヂストリーなど）である。このような地名は近代から現在まで残っている場合もあるし、長い年月の間には一時的に光彩を放っていた場合もある。後者に関しては、漢訳が複雑で困難である。

外来語地名を翻訳する時には、以下の規則が当てはまる。現在も残っ

ている地名に関して、近代日本語資料の原文と対照しながら翻訳する。現在残っていない地名に関しては、その文脈を考慮した上で直接音訳する。翻訳の中で、確認できていない外来語の地名が幾つかあるが、原文の意味を理解する上で特に支障がない。

表5に示したように、外来語地名を翻訳する時に、幾つかの留意点がある。第一に、複数の単語で構成されている可能性のある外来語である。その場合は翻訳する時に最小単位としての漢訳単語を見つけたほうがいい。たとえ「ド」や「デ」などのカタカナでもかまわない。第二に、『航西日記』はカタカナで地名を表記する際には、前後文が一致していないことが多い点である。これは日本語で外来語を音読みする時の複雑さによるほかに、当該地名の語源が冗長で複雑であるからである。第三に、語感の大切さである。語感は把握しにくいが、適宜参考すれば、漢訳の効率を上げることができるだろう。例えば、「アルゼリー（Algeria）」や「チユラン（Turin）」などの地理名称は、世界地理に詳しい訳者にとって、一度通読すればそのだいたいの意味が推測できる。後で、辞書で確認していけば、効率よく漢訳語を確定することができる。

総じてみると、外来語の地名を翻訳する際、対象言語の知識が必要とされるだけでなく、他言語の知識も広く理解しておいたほうがいい。特に、『航西日記』のような外遊紀行文を翻訳する時、幅広い知識を具備することは有利であろう。

四、近代日本語資料における物名の漢訳問題

上記の人名、地名と同じように、『航西日記』に記載されている物名も、漢字の物名と外来語の物名の二種類に分けられる。

4.1　漢字の物名

漢字の物名は主に中華文化圏の物を表記しているので、記述的な漢字がよく使われている。

表6 『航西日記』にある漢字の物名とその漢訳（一部）

番号	漢字の物名	原文のページ	漢訳のプロセス	漢訳
①	白瓜	19	今で「白瓜」は「真桑瓜」とも呼ばれる。	甜瓜
②	籐蓙	21	「蓙」は「莫蓙（ござ）」のことである。	藤席
③	箙杖	21	「箙」は竹製物の外套で、「箙杖」が竹の杖を収納する竹製の外套である。	竹杖
④	越列機篤児／越列機	7、85、93	蘭語表記で「エレキドル」は「electriciteit」となり、その中の「ド」が即ち「エレキテル」のことである。	电力
⑤	燈明臺	16、19、20、24、89、92	燈明臺（とうみょうだい）は、灯台・燭台・灯塔のことである。	灯塔
⑥	本草	26、59、142	「本草」は幾つかの意味がある。1、本草についての書類、即ち『本草綱目』のことである。2、会社の名前で、即ち本草製薬会社のことである。3、学科の名前で、本草学のことである。	1、本草书。2、本草制药公司。3、本草学、医学。
⑦	檳榔／檳榔	24	檳はここで表記できないので、借字の「檳」[12]で代用する。『航西日記』では「檳榔」のカタカナ表記は「マンコスタン」であり、「コ」が「ゴ」となる。要するに、「マンゴスチン（mangostana/mangosteen）」のことである。	山竹

これらの漢字の物名は音訳の語彙であるか、年月が経ったので「死

語」になるか、多義語であるかのいずれかである。次に、表6の用例を中心に、漢字の物名の翻訳過程について説明する。

まず、音訳による漢字の物名は比較的簡単である。「猫に照らして虎を画く」という原則に基づいて一つ一つ訳せばいい。例えば、「越列機篤児」は「電力（electricite）」の音読みからきている。次に、年月が経ったので「死語」になった漢字の物名は、すでに使われなくなった語彙もあり、また古今異義語の場合もある。例えば、「籐蓙」や「箙杖」などの「死語」を漢訳するには、これらの語彙を両断して解析するしかなく、即ち「籐蓙」を「籐」と「蓙」に分けられるが、「籐」は難しくなく、「蓙」の意味が重要である。では、「蓙」とは何者か。「草」字頭と「座席」の結合体としての「蓙」は、草藤（くさふじ）で編んだ着座可能な物らしい。そこで辞典を調べてみると、「蓙」とは確かに藺草が編んだ畳のことを指すとある。[13] したがって、「藤席」と訳しても違和感はない。「箙杖」の漢訳方法も同じである。古今異義語という「死語」の「異義」とは、厳密な意味で語義範囲の幅を指すべきである。例えば、「白瓜」という語彙は、今の日本語と中国語の双方で使われている。しかしながら、現在の「白瓜」は短冊形の野菜を指しているのが、原文の中の「白瓜」では「真桑」という注がついており、「真桑」は「真桑瓜（まくわうり）」、中国語では「香瓜、甜瓜」の意味を表す。『航西日記』の中の「白瓜を食し（本邦真桑の類）苦熱を凌ぐ」[14] という記録については、使節団は当時の暑い天気を凌ぐために「白瓜」を食べたのであり、それゆえ、ここでは「香瓜、甜瓜」と訳して差し支えない。

さらに、『航西日記』の中で何度も登場する漢字の物名がある。翻訳する時に、多義語としての漢字の物名に留意する必要がある。最も典型的な事例は「燈明臺（灯明台）」であり、以下のように、トータルで7回も使われている。

第1回：第16頁[15]の「瀾滄江の入口燈明臺の麓に至る」
第2回：第19頁の「川口なる燈明臺山の麓に至り」
第3回：第20頁の「新嘉埠燈明臺を過る（燈明臺は海中の突起せる岩上へ造立て堅固にして他に超へ高く聳へたる者也）」
第4回：第24頁の「海岸西の方に燈明臺あり」
第5回：第89頁の「鉄造の燈明臺」
第6、7回：第92頁の「木造の燈明臺……越列機にて点火する燈明臺」

「燈明臺」とは何か。『広辞苑』では「点灯の台」と解されているが、二種類の解釈がある。[16]『日本国語大辞典』では三種類の説明をあたえている。[17]総括してみると、「燈明臺」には少なくとも三つの意味がある。①室内照明の灯台、燭台。②航海標識、灯台。③街灯、ガス灯。そこで、『航西日記』で使われている「燈明臺」を前後の文脈と合わせてみると、それぞれ以下のように訳すことができよう。

第1回：第16頁の「瀾滄江の入口燈明臺の麓に至る」は「抵达澜沧江入海口处的灯塔脚下」、
第2回：第19頁の「川口なる燈明臺山の麓に至り」は「抵达河口位置的灯塔山脚下」、
第3回：第20頁の「新嘉埠燈明臺を過る（燈明臺は海中の突起せる岩上へ造立て堅固にして他に超へ高く聳へたる者也）」は「经过新加坡的灯塔（灯塔是建在海中凸起的岩礁上的、坚固并远高于海平面的高耸建筑物）」、
第4回：第24頁の「海岸西の方に燈明臺あり」は「海岸西面有灯塔」、
第5回：第89頁の「鉄造の燈明臺」は「铁制灯塔」、

第6、7回：第92頁の「木造の燈明臺……越列機にて点火する燈明臺」は「木制灯塔……电力驱动的路灯」、となるのである。

第7回の「越列機にて点火する燈明臺」の「燈明臺」はなぜ「电力驱动的路灯」と訳されたのか。この問題を解決するためには、近代史における電力革命についての知識を用いて理解しなければならない。1879年にエジソン（Thomas Alva Edison、1847-1931）が商業用の白熱電球（Incandescent Lamp）を発明する前には、欧米国家ないし世界で通用する電球はアーク灯（Arc lamp）であった。1890年代までには世界各国で電力を供給するのは主に直流発電所であった。直流発電は電圧が低く、送線の距離が短いのが特徴である。1867年のパリ博覧会では、電力によって駆動される街灯を建設し、世界各国の前でフランスの強い工業生産力を示す効果につながったに違いない。「灯台」と訳さなかったのは、当時の発電技術が大規模な電力設備を動かすことができるかどうか確信を得ることができなかったからだ。

漢字の物名はそれが多義語であるかどうかを考えるほか、文脈に応じて、最小単位としての漢訳語彙を確定し、適切な訳語を選択しなければならない。例えば、「本草」は『航西日記』に3回ほど使われていた。

第1回：第26頁の「本草に鮫は南海に産し」
第2回：第59頁の「本草会社討論場へ人を遣わざる」
第3回：第142頁の「靄山外三人帰国を命ぜられ本草学生某も事充て共にかへらしむ」

『日本国語大辞典』における「本草」は「①植物の一つ。②薬草。③

『本草書』の略称。④「本草の学」の略称」という四つの解釈がある。[18] これに対して、それぞれの漢訳文は、

第1回：第26頁の「本草に鮫は南海に産し」は「本草书中记载鲨鱼产自南洋」、
第2回：第59頁の「本草会社討論場へ人を遣わざる」は「本草（医药）公司遣人去会场」、
第3回：第142頁の「靄山外三人帰国を命ぜられ本草学生某も事充て共にかへらしむ」は「杉浦爱藏及其他三人受命归国，另有一名医学生因事也随之同行」、となっている。

最後に、漢字の地名にある「異体字」についても論じてみる。「橶檎（jié・jin）」の例がある。「康熙字典」に「橶」が「蜜柑」の意味であり、「檎」が竹木格のことを指す。[19] このように個別の意味が分かるが、それによって構成された新しい単語の意味はよく分からないものがある。幸いに、1871年版の『航西日記』ではこの語彙の隣にカタカナの「マンコスタン」が傍注されており、上文でまとめた解読規則と結びつけて、「「マンゴスタン/マンゴスチン」は英語の「mangostana/mangosteen」である」という対応関係を導いた。これも文脈の中で果物などの物産を紹介する際の論理と合致している。「黄橙、橶檎、桂枝、甘蔗等良好なり」[20] の漢訳文は「蜜柑、山竹、荔枝、甘蔗等特产很不错」となる。

上記の内容を通じて、近代日本の「西洋化」は中国人によく知られているが、近世末期から近代初期にかけて日本文化において漢文の要素は依然として重要であり、無視できないことが明らかである。そのため、古典漢語の知識は近代日本語資料を漢訳する上で必要不可欠である。

4. 2　外来語の物名

使節団の「航西」の旅は政治的な任務であるが、徳川幕府が西洋ないし世界の様子を知ろうという念願も背負っている。そのため、旅先で日常的に見たものが記載されただけでなく、今から見ると奇妙なものも多く記録されていた。これらの不思議な外来語の物名を解釈することで、19世紀のユーラシア大陸をまたがる長距離の旅の風景が窺えるだけでなく、外来語の物名の表記方式を通じて、当時日本のエリート層が西洋と世界に近づき、それを理解しようとする姿が浮かび上がってくる。

表7　『航西日記』の中にある外来語の物名とその漢訳（一部）

番号	外来語の物名	原文のページ	漢訳のプロセス	漢訳
1	フイヨン	4	「フイヨン」の「フ」が「ブ」となって、「ブイヨン」となる。	肉汤
2	タント	33、191	「タント」の利用場面を再現する。	帐篷
3	マルブル	35、170	「マルブル」の「ル」は長音の「ー」となって、「マーブル」となる。	大理石
4	ジリジヤンス	167、168	「ジリジヤンス」は「ヂリジェンス」と、「デリジェンス」となる。最後に、乗り物の「ディリジェンス（diligence）」となる。	公共马车
5	ソーシーソン	72	「ソーシーソン」はフランス語で音読みしてみれば、「Saucisson（ソーセージ）」に対応する。	红肠、灌香肠
6	オルチエストラ	87	「オルチエストラ」のローマ字表記は「oruchestra」であり、英語の「orchestra（オーケストラ）」に近いから、古代におけるギリシャとローマの劇場前部の円形舞台を指すとある。	古希腊罗马的圆形舞台

7	ジヤマント	88	「ジヤマント」は「ヂイヤモンド」となり、次に「ダイヤモンド」となる。	钻石
8	ヒラミード	35	「ヒラミード」の「ヒ」が半濁音の「ピ」と、長音の「ー」が促音の「ッ」と、濁音の「ド」が「ト」となる。ピラミッドと判断することができる。	金字塔
9	ブランケツト	62	「ブランケツト」の「ツ」は半角の「ッ」と、「ブランケット」となる。	毯子、毛毯

上記の外来語の物名には、日常用品、食べ物、乗り物及びその他の普通名詞と固有名詞が含まれており、漢訳過程におけるカタカナの変音規則は表3を参照する。即ち、カタカナの半角化、長音化、濁音・半濁音化と非濁音・半濁音化、母音と子音の音節変化などの現象は全て外来語の物名に反映されている。これらの変音規則の他には、外来語物名には「タント」「ジヤマント」「ヒラミド」「ブランケツト」のような現代日本語と近いものや、同じ外来語もあるし、「バツテラ」「ハベル」「カングロウ」のような意味不明な外来語もある。以下、このような語彙を翻訳する時に、どのように対応すればいいのかという心得を紹介する。

まず、翻訳の中でよく知らない外来語が出たら、それをしばらく置いておき、一段落を全て翻訳してから、また改めて分からない語彙の意味を推敲し、これに応じて該当する外来語を探して、カタカナで対応できるようにする。例えば、「フイヨンといふ獣肉鶏肉などの煮汁を飲しむ」[21]はとりあえず「一种名为“フイヨン”的汤由兽肉和鸡肉等煮制而成」というふうに訳しておけばいい。「Bouillon」は「牛肉や他の肉を煮込んだスープや肉汁」[22]のことであり、現代日本語で「ブイヨン」で表記される。前述のカタカナの変音規則（表3）によると、原文の「フイヨン」は「Bouillon」の「ブイヨン」であると判断できる。これと同じように、

「タント」と「マールブル」も文脈によって具体的な意味が判明できる。

例文1「タント/テント」:「タントは四方鉄、又は木柱家根とも布幕をもて雨露をしのく、土人用て仮の家屋とす。蓋磽确の地は民水草によりて移転す、故に家屋も運搬に便なる為め、上世より如斯作為すと云。」[23]（漢訳文：“タント”以四方铁或者木柱为支撑，覆以布幕来遮风挡雨，是当地人的临时居所。之所以如此，是由生活在磽确贫瘠之地的百姓逐水草而居的习惯所致，而帐篷便是当地居民为方便迁徙而设计的，这种习惯自古就有。）

例文2マルブル：「此の地に一巨寺あり、マルブルにて（蝋石なり）建立し」[24]「別宮の玄関及石階とも総てマルブルといふ白き石にて（蝋石の類）築き立、最瑩潤光沢あり」[25]（漢訳文：当地有一规模宏大的清真寺，以“マルブル”（一种蜡石）建筑而成。国王行宫的玄关和石阶都由一种名为大理石的白色石头筑造而成，晶莹润泽。）

例文1は「タント」をめぐって、その効用を説明したのである。「タント」とは、「四方鉄（鉄鋼の製品）」と「木柱」で造った屋根の上に「布幕」を張って「雨露」を凌ぐものである。「タント」が古い「上世」から今でもよく使われている地方は「磽确の地」である。これらの情報をまとめて分析すると、「タント」は砂漠地域の伝統民居「テント」のことと判断できる。さらに使節団の旅程と合わせてみると、そこは中東地方を指しているだろう。

例文2は「マルブル」のことを説明したのである。『航西日記』では二つのところに「マルブル」が使われている。一つは、建物の「巨寺」に用いる建築資材である。もう一つは、「別宮の玄関及石階」に用いる構

築材料である。両方に「蝋石」の注釈文字が付けられていたので、二つの「マルブル」は同じものであると判断できる。そこで、「巨寺」と「別宮の玄関及石階」をさらに究明する必要がある。原文を参考にすれば、「巨寺」はエジプトの宗教場所を指している。エジプトの歴史と宗教知識に基づいて探ってみれば、「巨寺」はイスラム教の礼拝堂、即ち「モスク（mosque）」のことを指している。「別宮」は近代フランス皇帝の宮殿である。宗教と政治の場での利用を背景にして、「蝋石」に近いという情報をも考慮にいれたら、「マルブル」とは「マーブル（marble）」のことであると推測できる。

ただし、上記の文脈で意味が推測できる外来語もあれば、「欄干を拍つこと遍く」でも手がつけられない外来語もある。「ジリジヤンス」や「オルチエストラ」などの難しい語彙を翻訳する時には、ローマ字の読み方から工夫する必要がある。

「ジリジヤンス」は「ジリ」「ジヤン」「ス」という三つの単語に分けられる。ローマ字表記では、「ジリ」は「jili」「dili」「zili」の三つの書き方があり、「ジヤン」の書き方は「jyan」である（「j」は「g」、「yan」は「ien」と同じだから、「gien」という書き方もあるだろう）。さらに「ス」は「si」「se」「ci」「ce」の四つの書き方がある。それゆえ、ローマ字表記で「ジリジヤンス」の書き方は以下の状況がある。即ち、第一のdiligiense、第二のdiligiensi、第三のdiligienci、第四のdiligience（「jili」「zili」は語頭にあてない）である。そこで「diligence（「diligience」の「i」が省略され）」という語彙が出てきたが、「勤勉（diligence）」を意味するにもかかわらず、なぜ「公共马车」と訳されたのだろうか。まず、それに関係する背景に触れてみる。原文には「ジリジヤンス」が三か箇所ある。

第1回：第167頁の「故ジリジヤンスといふ旅行馬車にて、山頂を踰るなれば」（漢訳文：故搭乘一种名为“ジリジヤンス”的旅行马车翻越山顶）

第2、3回：第168頁の「朝六時、ジリジヤンスと云馬車二輌を雇ふて発す。此のジリジヤンスといふは巴里辺にて用ゆるオムニヽブスといふ車に同しく。其制長大にして、尋常の馬車に異なり、一車に八人又は十人を載せ。二階にして、階上に荷物を容る。平垣の地は二馬を駕し。険路には六馬、八馬、十二馬を駕し。処々に会所ありて、馬を取換へ又は水飼などして疲労を助く、頗る簡便なり。先年、欧洲瀛車発明の前は総て旅行に、此馬車を用ひたりし、故今も僻郷は故態を存すといふ。」（漢訳文：早上六点，我们搭乘两辆“ジリジヤンス”出发。此所谓“ジリジヤンス”与巴黎附近使用的“乘合马车”相类似。其车身巨大且长，异于普通马车，一辆能搭载八至十人。分为两层，第二层装载行李。平坦地面上由两匹马牵引，否则是由六匹、八匹甚至是十二匹马牵引。道路沿途设有站点可替换马匹和为马匹提供水源和草饲，以此来缓解马匹的疲乏，十分简便。早年尚未发明火车之时，欧洲人都乘坐这类马车出行，这种出行方式时至今日仍保留在一些穷乡僻壤间。）

さて、原文から以下の情報が得られる。第一に、「diligence」とは山を越える乗り物である。第二に、「diligence」は「乗合馬車（Omnibus）」と似ていて、公共的な馬車である。第三に、原文の内容に基づき、使節団はフランスのシャンベリ（Chambéry）からイタリアのスーサ（Susa）に向かう際に乗ったため、この「diligence」はフランスとイタリアの間

に運行している乗り物であると推測できる。

以上、当時の情報を踏まえて、「diligence」は「パリおよび周辺地域で使用されていた乗合馬車」であると判断し、今でもその姿が見られる。

図1　パリの乗合馬車（1900年）

参考資料：Brooklyn Museum、http://www.flickr.com/photos/brooklyn_museum/2485991065/、最終閲覧日：2022-09-25

『航西日記』によると、「diligence」の大まかな運行状況が分かり、その基本的な特徴が上の図1の情景に似ていることから、「diligence」を現在の意味のように「勤勉」と訳すことができない。実際には、もともとの「diligence」の意味は「public stage coach（大衆に奉仕する長距離馬車）と解し、[26]「ジリジヤンス（diligence）」を中国語の「公共马车」と訳したのである。

ローマ字表記方式から着手すると、「オルチエストラ」は上記の「ジリジヤンス」より簡単である。つまり、「オルチエストラ」とは「oruche（「エ」が半角となり）sutora」であって、語頭と語尾の部分を除いて母音が脱落し、「orchestra」になる。しかし、中国語では「orchestra」はバンドとしての「管弦乐队」であり、原文の「オルチエストラの円形な

る宮殿」に「オーケストラ」を代入しても、明らかに意味が通じないので、さらに「orchestra」の語源を調べる必要がある。英語辞典を調べてみたら、「orchestra」について幾つかの有効な情報がまとめられる。[27] 第一に、「orchestra」の語源は古代ギリシャ・ローマ時代に遡ることができる。第二に、「orchestra」は劇場、舞台など重要な位置にある。このように検討していけば、「orchestra」という語彙に含まれている古代ギリシャ・ローマ時代の要素を加味して表現すれば、「古希腊罗马风格的圆形宫殿」と翻訳できるだろう。

むすび

国立国会図書館デジタルコレクションやアジア歴史資料センターなどのウェブサイト・データベースはきわめて便利なものである。このような近代日本語資料を簡単に入手できるようになった状況下にあって、文献の解読と漢訳問題は中国の学界でますます重要視されるようになってきた。

筆者は渋沢栄一の『航西日記』を漢訳する経験に基づいて翻訳する際の注意点、例えば人名、地名と物名に関する翻訳の対応策を示してみた。換言すれば、近代日本語資料を翻訳する際、漢字語彙と外来語語彙の漢訳という二つの難関がある。「漢字語彙の漢訳」は、古典漢文と近代日本文語知識の蓄積と関係ある。「外来語語彙の漢訳」は、近代日本文語の発音規則の難しさと関係ある。上述の二つの難関を乗り越えられたら、やっと近代日本語資料の解読と漢訳の入門段階を終えたといえよう。今後の翻訳と研究の中で、上記のまとめた漢訳規則や基本的な漢訳要領に関する討論を深め、事例を増やしながら、漢訳規則の応用範囲の拡大を試みる。さらに、辞書やウェブサイトなどの翻訳支援ツールを活用しながら、更なる漢訳経験を整理できるだろう。

学問と同じように、翻訳にも限界がない。近代日本語資料を翻訳する時には、基本的な歴史事実を尊重するだけでなく、訳語の通俗化に努めなければならない。それゆえ、漢字と外来語表記で人名、地名と物名などの意味を理解し、把握する上で、適する漢訳方法の選択も考慮しなければならない。訳者が原作者の身になってからやっと彼らの心境が理解できるようになるだろう。それを実現するために歴史知識を熟知するだけでなく、中日両国の風土と文化の相違点も視野に入れる必要がある。

参考文献

［1］大塚武松編『渋沢栄一滞佛日記』日本史籍協会、1928年。
［2］渋沢栄一、杉浦靄人『航西日記』耐寒同社、1871年。
［3］諸橋轍次、鎌田正、米山寅太郎著『広漢和辞典・上巻』大修館書店、1982年。
［4］新村出編『広辞苑・第六版』岩波書店、2008年。
［5］張玉書、陳廷敬等編纂『康熙字典』武英殿本、1716年。
［6］国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典・第二版・第九巻』小学館、2001年。
［7］国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典・第二版・第十八巻』小学館、2001年。
［8］ONLINE ETYMOLOGY DICTIONARY（https://www.etymonline.com）。
［9］Brooklyn Museum（http://www.flickr.com/photos/brooklyn_museum/2485991065/）。

---

［1］渋沢栄一、杉浦靄人『航西日記』耐寒同社、1871年。『航西日記』

の著者は二人いるが、杉浦靄人は「航西」の途中で所用のため帰国したのに対して、渋沢栄一は終始昭武使節団の「航西活動」に関わり、『航西日記』への貢献度が高いと考える。そこで、記述上の便利さも考慮し、本稿で『航西日記』の作者を表現する際、「渋沢栄一」のみを記した。

［2］大塚武松編『渋沢栄一滞佛日記』日本史籍協会、1928年。

［3］Paul Luce Hipporyte Flury-Hérard（1836-1913）はフランスの銀行家と近代日本の名誉総領事で日仏貿易に従事する。

［4］大塚武松編『渋沢栄一滞佛日記』、「敍」、第1頁。原文は「大蔵卿伊達公伝聞慫慂上梓」である。

［5］同上。原文は「余与靄山杉浦子基、従我公使、使於泰西」である。

［6］国立国会図書館憲政資料室：『日記の世界』「杉浦譲の日記について」。（https://www.ndl.go.jp/nikki/person/sugiurayuzuru/、最終閲覧日：2023-12-30）

［7］大塚武松編『渋沢栄一滞佛日記』、第143頁。

［8］稲垣才三郎『英仏通弁自在：交際商用（巻一）』競錦堂、1882年、第37頁。

［9］清水卯三郎『当世言逆論・政体篇』瑞穂屋蔵版、1882年、第1丁。

［10］諸橋轍次、鎌田正、米山寅太郎著『広漢和辞典・上巻』大修館書店、1982年、第1093頁。

［11］新村出編『広辞苑・第六版』岩波書店、2008年、第1108頁。

［12］張玉書、陳廷敬等編纂『康熙字典』武英殿本、1716年、「辰集中―木部―十二画―九十九」。

［13］新村出編『広辞苑・第六版』、第1005頁。

［14］大塚武松編『渋沢栄一滞佛日記』、第19頁。

［15］『渋沢栄一滞佛日記』、即ち一九二八版の『航西日記』を参考にし

てページ番号を記しておいた。

［16］新村出編『広辞苑・第六版』、第1988頁。辞書の原文は「①は油を灯してあかりとする室内照明器具である。②は航路標識の一つ。沿岸航行の船舶に目につきやすく建てられた塔状の構造物で、夜間は灯光を用いて、陸地の遠近・所在・危険箇所などを指示し、出入港船舶に港口の位置を示す。」である。

［17］国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典・第二版・第九巻』小学館、2001年、第1050頁。辞書の原文は「①昔の室内照明具。木で作り、形は燭台に似て上に油皿を置いて油火をともす台。②航路標識の一つ。港口・岬・島などに築き、夜間、主として灯火の標識を出して、航海者にその位置を知らせたり、航路を指示したりする施設。③灯明台。街を照らすために設置された灯火、街灯、ガス灯。」である。

［18］国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典・第二版・第十八巻』小学館、2001年、第247頁。

［19］張玉書、陳廷敬等編纂『康熙字典』、「辰集中―木部―十三画―百零九」。

［20］大塚武松編『渋沢栄一滞佛日記』、第24頁。

［21］同上、第4頁。

［22］ONLINE ETYMOLOGY DICTIONARY、「Bouillon」。（https://www.etymonline.com/search?q=Bouillon、最終閲覧日：2022-09-11）

［23］大塚武松編『渋沢栄一滞佛日記』、第33頁。

［24］同上、第35頁。

［25］同上、第170頁。

［26］ONLINE ETYMOLOGY DICTIONARY、「diligence」。辞典の関

連内容は「From the secondary French sense comes the old useage of diligence for “public stage coach” (1742 ; dilly for short), from a French shortening of carrosse de diligence.」である。(https://www.etymonline.com/word/diligence#etymonline_v_8577、最終閲覧日：2022-09-11)

[27] ONLINE ETYMOLOGY DICTIONARY、「orchestra」。辞典の関連内容は「“area in an ancient theater for the chorus,” from Latin orchestra, from Greek orkhēstra, semicircular space where the chorus of dancers performed, with suffix -tra denoting place + orkheisthai “to dance,” perhaps an intensive of erkhesthai “to go, come,” but not all experts accept that (see Beekes).

In ancient Rome, orchestra referred to the place in the theater reserved for senators and other dignitaries. Meaning “group of musicians performing at a concert, opera, etc.” is recorded by 1720, so called because they occupy the position of the orchestra relative to the stage ; that of “part of theater in front of the stage” is from 1768 in English.」である。(https://www.etymonline.com/word/orchestra#etymonline_v_7120、最終閲覧日：2022-09-11)